虹（にじ） 悔しさ糧に 監督の道へ



新川高校女子硬式野球部の監督を務める今方さん

㉑1 県内初の女子野球部誕生

野球でいえば、今は攻撃の場面だろう。新川高校女子硬式野球部の監督、今方（いまかた）杏香（きょうか）さん(26)は思う。部が創設されたのは今年４月。本格的に活動する来年度に向け、入学する選手を集めなければならない。

夏は小まめに中学生が出場する大会の会場に足を運んだ。「私が選手だったら、見に来てくれる人の方が信用できる。自分を知ってもらうことが一番」。選手に声をかけ、指導者たちと会ってきた。

近年、野球をする女子小中学生が目立つようになったが、県内の高校に女子野球部はなかった。その受け皿となるため、新川高校に部が発足。今方さんは転職して４月から同校教員となり、部の監督に就いた。在校生の入部は想定していなかったが、選手２人とマネージャー２人が入った。

10月の体験会には、県内や近隣県の中学３年生９人が参加。きびきびとしたプレーを見せた。ただ、自宅が遠い人の通学などの課題がある。本人や保護者の意向をしっかりと聞きながら、部員の確保を目指す。

◇

今方さんは高岡市福岡町出身。３姉妹の長女として生まれた。幼稚園の頃から、父親の順哉（じゅんや）さんが監督を務める地元の少年野球チームの練習を見に行っていた。遊び相手をしてくれたのが少年野球の選手たちで、今方さんが小学２年生で入団したのも自然な流れだった。自宅でも父や妹と毎日練習した。野球はずっとそばにあった。

少年野球チームのＯＢが高校生となって甲子園に出場すると、父と一緒にスタンドから声援を送った。兄のような存在だった先輩たちが大舞台でプレーしている姿が目に焼き付いた。

小学生では男女が一緒にプレーしていたため、中学校では野球部に入るつもりだった。だが、学校側から入部は認められなかった。理由は女子だから。ソフトボール部も入学前になくなっていた。ソフトテニス部に入りながら、母親のソフトボールチームや妹が入る少年野球チームで練習した。

高校受験を控えた頃、富山市に女子中高生の軟式野球クラブチーム「BEENS」があることを知った。スポーツも勉強もしっかり両立させることが両親の考え。高校受験が終わってから入団した。

◇

高校野球では、女子は高野連の規定で公式戦に出場できない。今方さんは進学した地元の県立高校で、「練習だけでも参加させてほしい」と監督に訴えた。だが、認められず、野球部のマネージャーに。思いを伝えるため、誰よりも早くグラウンドに行って草むしりをし、ボールの汚れを拭き取り、お茶を作り、選手のサポートに徹した。

夏の大会の後、新たなマネージャーが加わり、仕事が分担できるようになった。冬ごろから部員と一緒にトレーニングし、外野の守備練習に参加できた。「男子に負けたくない」という気持ちとともに「感謝しなきゃいけない」とも思った。男子からプレーのアドバイスを求められることもあり、頼りにされるのがうれしかった。

高校２年のある日の夕方。今方さんが野球部の部室横の洗い場でお茶の容器を洗っていると、男子部員たちの会話が聞こえてきた。「別に甲子園なんか行かんでもいいし」「１回戦負けでいいやろ」



「木守り」広田 郁世

怒りが込み上げる。女子の自分は、そもそも甲子園を目指すスタートラインにすら立てない。強豪校ではないし、甲子園に行ける可能性は低いかもしれない。でも、そんな言葉は口にしてほしくなかった。言い争っても意味がないと思った。憤りを飲み込み、女子更衣室で涙を流した。

「男に生まれたかった」。小学校の頃からずっと抱き続けてきた思いは、高校時代にさらに強くなった。

◇

高校の部活動とともに、週末は女子のクラブチームの活動を続けた。部活動の練習や見たプレーを参考にして腕を磨いた。

３年生でキャプテンを務め、４番打者の捕手。全国大会では、優勝候補の千葉のチームに勝利し、ベスト８入りを果たした。

敗れた相手は愛知の高校で、選手が部活動として野球をしてきた強豪。パワーの差は感じなかったが、意識や練習の量に違いがあったように思えた。自分とは環境の異なる高校に敗れたのが悔しかった。

全国大会での活躍や学校の成績が良かったことから、金沢大の学校教育学類の推薦入試に合格。準硬式野球部に入りながら、女子のクラブチームでもプレーを続けた。

大学３年の夏。今方さんは自宅で全国高校女子硬式野球選手権大会の決勝を見ていた。甲子園で決勝が行われる初の大会。決勝に進んだ神戸弘陵（兵庫）には、４歳下の妹の凛（りん）さんがいる。コロナ禍の入場制限で、現地観戦できるのは父だけ。スマホをテレビにつなぎ、家族で配信映像を見守った。

試合は神戸弘陵が勝利。副キャプテンの妹は歓喜の輪の中にいて、人さし指を突き立てて笑顔を浮かべている。妹が屈指の強豪校で苦労しながらも、栄冠をつかんだことがうれしかった。でも、自分と比べると、悔しくも感じた。

大学時代はコロナ禍のため、教育実習は１カ月の日程が半分ほどに短縮され、「このまま教員になっていいのか」と感じた。社会を広く知るために一般企業に勤めようと考え、県内の自動車販売会社に就職。教員免許は取得したが、試験は受けなかった。

クラブチームはメンバーの就職や出産が重なって活動していなかったが、今方さんらは2023年に新チーム「笑福来門（しょうふくらいもん）」を結成。父が監督を務める小学生女子野球チームのコーチも務めるようになった。

◇

高岡向陵高校の校長、宮袋誠（みやぶくろまこと）さん(59)と初めて会ったのは、昨年９月のことだった。宮袋さんは高岡商業高校の監督としてチームを甲子園に４度導いた名将である。高岡向陵高校と新川高校を運営する荒井学園で女子野球部の創設を検討しているといい、意見を求められた。

１カ月後、宮袋さんと再び会った時に監督を打診された。交通の便や球場への近さが考慮され、部ができるのは新川高校。魚津市では全日本大学女子野球選手権大会が毎年開かれ、女子野球に理解のある地域であることが何よりの理由だった。

今方さんは入社４年目で、仕事も覚え、これからという時期。すぐには返事できなかった。だが、野球がしたくてもできなかった頃を思い出す。今も環境がないために、野球を諦めてしまう女子もいる。「自分と同じ思いをさせたくない」。監督を引き受けることを決め、両親も後押ししてくれた。

「ゼロから部を立ち上げるのは非常に難しいミッション」と宮袋さんは言う。「今方さんに監督をお願いしたのは、女子野球の普及に強い思いを持っているのが一番の理由。現役時代に悔しい思いをした経験が必ず生きると思った」と振り返る。

今方さんは新川高校に出向き、宮袋さんらと校内を回った。校舎の窓から海が見えるのが印象的だった。

◇

10月中旬、女子野球の大会「桃山フレンドシップマッチ」が魚津市で開かれ、今方さんの笑福来門を含め８チームが集った。

今方さんは、選手としてプレーするのはこの大会で一区切りにすると決めていた。来年度からは女子野球部の仕事が忙しくなるためだ。

会場の桃山野球場は、雲一つない快晴。センター方向から緩い風が吹いている。富山大との試合は五回を終えて１―５と、４点を追いかける展開となっていた。

六回無死一塁。今方さんが左打席に立つ。送りバントを試みたが、２球連続でファウル。今方さんはヒッティングの構えから、バットを思い切り振り切った。快音とともに白球は右中間へと伸びていく。

桃山フレンドシップマッチで、今方さんのチームは残念ながら２戦２敗。相当悔しかったそうで、「仕事をおろそかにしない程度に続けようかな」とのこと。負けん気の強さも、新たな道を進む原動力になっているのかもしれません。



「虹」第10集 販売中

「虹」を書籍化しています。最新刊の第10集『虹　坂道を駆けのぼる音』は2024年６月から26年１月までに掲載した20編を収めています。1,210円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076（445）3352（平日午前９時～午後５時）。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933―0911 高岡市あわら町13―50
北日本新聞社西部本社「虹」係
FAX 0766－25－7773
mail niji@kitanippon.jp

次回掲載は12月１日（火）です。

紙面提供／人と鉄のあいだに
OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作／北日本新聞社
メディアビジネス局